



写真提供：群馬県吾妻郡長野原町

首都圏の暮らしを守るハッ場ダム ー上下流がつながり、支える水源地の未来ー

1. はじめに
2. ハッ場ダム建設事業について
3. 水源地域対策
4. 本体工事
5. 生活再建・地域振興
6. おわりに

講演者



朝田 将

内閣府（防災担当）
参事官（調査・企画担当）
（元ハッ場ダム工事事務所長 完成時）



尾根田 勝

（独）水資源機構監事
（前東京都水道局技監）



虫明 功臣

東京大学
名誉教授



陣内 孝雄

元法務大臣・元参議院議員
（元ハッ場ダム工事事務所長）



中島 聡

群馬県住宅供給公社
理事長
（元群馬県県土整備部長）

1. はじめに

終戦直後に発生したカスリーン台風は、利根川に堤防決壊をもたらし、その浸水被害は遠く東京湾近くまで及んだ。この大規模水害を機に計画されたハッ場ダムは、1952（昭和27）年の調査着手から約70年を経て、2020（令和2）年4月から運用を開始した。

首都圏の治水・利水面で大きな役割・効果を担う一方で、地元の理解・協力を得るまでに長期間を要した背景には、道路、河川事業等とは異なるダム事業特有の課題があった。また、ダム本体建設では、名勝地の保全に配慮するとともに、生産性革命に沿った新技術活用による高速施工等に取り組み、結果、令和元年東日本台風来襲直前の2019（令和元）年10月1日に試験湛水を開始し、被害軽減に大きく貢献した。

本講演では、これらハッ場ダム建設事業を巡るダム事業特性を踏まえた経緯や取組等について、事業主体である国、地元県・水源県、受益地それぞれの立場から紹介する。

2. ハッ場ダム建設事業について

（1）諸元、目的など

ハッ場ダムは、国が事業主体となり、利根川水系吾妻川の中流域（群馬県吾妻郡長野原町および東吾妻町）に建設された多目的ダムであり、その目的は、①洪水調節、②新規都市用水の供給、③流水の正常な機能の維持、④

発電である。

ダム本体の規模は、堤高116.0m、堤頂長290.8mであり、集水面積は約711km²と利根川上流ダム群の中で最大である。

（2）利根川流域の治水・利水とハッ場ダムの意義

利根川流域には我が国の総人口の約1割が生活しており、流域外に及ぶ想定氾濫区域も含め、人口・資産が集中するエリアであり、全国の他の河川と比較して、流域に占める水源山地部の面積が小さく、平野部の面積が広いという特徴がある。

また、江戸に幕府を開いた徳川家康の利根川東遷事業という歴史的な経緯を経て、利根川本川への洪水の負担が集中しており、その点で治水対策が難しいという課題がある。

1947（昭和22）年9月に発生したカスリーン台風では、利根川本川の堤防決壊に伴い、氾濫水が5日間をかけて東京の下町・小岩などに到達し、その浸水範囲は大規模なものとなった。このため、直後に策定された利根川改修改訂計画において、ハッ場ダムを含めた上流ダム群による洪水調節計画を導入することが決定された。

利水面では、戦後の首都圏への人口集中や高度経済成長による都市用水の需要急増に伴い、関東平野において水不足が頻発化、さらに地盤沈下の進行が顕在化し、特に首都東京では、多摩川の水源だけで水道需要の急増に



図1 利根川流域図

振興」と「ダム建設の促進」に全力で尽力してきた。

水没関係者の生活再建等に係る制度確立のため、水源地域開発法（仮称）制定を要望し、国と地元の調整が難航する中、県独自の生活再建案を地元提示し、水特法を活用したインフラ整備の促進、下流都県の協力を得た対策基金を活用した地域振興施設等の整備を進め、「ダム建設だけでなく、新たなまちを造る事業」としての生活再建事業を推進し、国とも連携し、水特法に基づく「水源地域整備計画」を策定した。

水没地の方々に、ダム建設に向けて動き出した姿を見せるため、県独自にJR長野原草津口駅前の長野原駅前大橋の工事に着手するとともに、県内部のダム関係組織を大幅に強化し、現地には「ハッ場ダム水源地域対策事務所」を設置するなど、国直轄の事業に対し、全国でも前例を見ない支援体制を構築した。

また、「道の駅ハッ場ふるさと館」を整備するなど、関係都県の協力を得て地域の方々に勇気を与える成功事例をつくるため奔走するとともに、川原湯温泉の入れ込み客数を増やすため、県独自の宿泊助成制度を構築し新たに掘り当てた源泉を長野原町に無償譲渡した。さらに、地域高規格道路「上信自動車道」の整備を通じて、吾妻エリア全体の活性化を推進している。

(3) 受益地・東京都の取組み

首都・東京の安定的な給水を継続するためには水源確保が必要不可欠である一方、急激な都市化に伴う水道需要の増加に対応が必要となる中、多摩川の水源地は限界を迎え、域外水源である利根川などに新たな水源を求める必要があった。このため、1953（昭和28）年、都は利根川を都の水道水源として利用できるよう国に要望を行い、1957（昭和32）年に閣議決定された「利根特定地域総合開発計画」に盛り込まれた。また、同年の特定多目的ダム法に基づく矢木沢ダムや下久保ダムの施行、1962（昭和37）年の利根川水系フルプランの策定により、利根川水系において都の水道水源が確保されることとなった。ハッ場ダムについては、1976（昭和51）年にフルプランへ追加される以前から、重要な水源として位置付け、建設促進に



写真4 道の駅ハッ場ふるさと館

向け、都知事が水源県である群馬県知事を訪問して協力を要請し、併せて、国に対しても水源地域対策を含む水資源開発推進を強く要請した。

政権交代に伴う中止表明（2009（平成21）年）の際には、下流受益地である一都五県においても各都県知事が先頭に立って中止の撤回を目指して一致団結して行動した。こうした多くの関係者の努力が実り、ダム検証の結果、ハッ場ダム建設事業が継続されることとなった。現在、ハッ場ダムを始め利根川・荒川水系の水源は、都の安定給水において重要な役割を担っている。

一方で、治水・利水両面で恩恵を受ける下流受益者としては、水源地域の生活環境や産業基盤の整備、生活再建等に取り組むことが重要と考え、水源地域対策にも尽力してきた。水源開発には、水源地域住民の理解と協力が不可欠として、フルプラン変更では、生活再建や地域開発振興に係る意見を第一に掲げて要請し、下流都県に



図3 ハッ場ダムから東京都への水の流れ



写真5 上下流交流の様子

よる「利根川・荒川水源地域対策基金」を設立した。

また、1998（平成10）年度から、水源地と下流受益地の交流の促進を目的として、水源県や都民の方を対象とした「上下流交流事業」を群馬県と共同で継続的に実施している。



写真6 24時間施工状況（本体コンクリート打設）

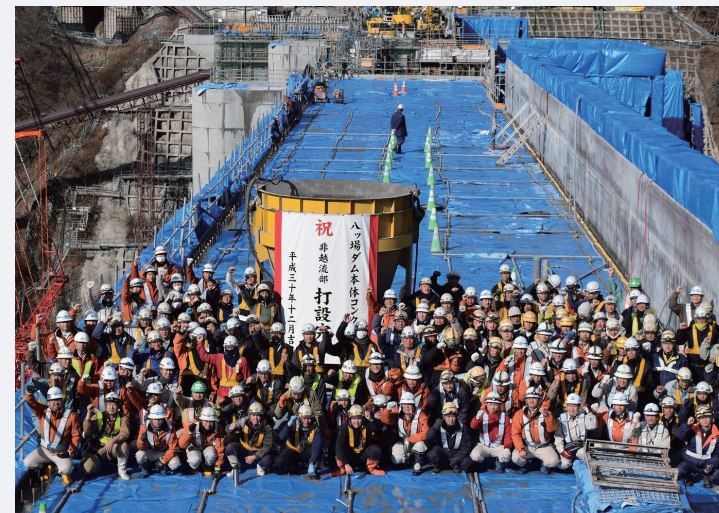


写真7 非越流部打設完了（最高高さ到達）



10月11日 状況写真
写真8 2019（令和元）年東日本台風に伴う貯水位上昇

10月15日 17:00 状況写真

2019（令和元）年10月1日に試験湛水を開始し、直後の令和元年東日本台風に伴う洪水をほぼ全量貯留することにより約2週間で貯水位は最高水位に到達した。その後、堤体、貯水池斜面の安全性確認を経て、2020（令和2）年3月に試験湛水を終了し、管理に移行した。

5. 生活再建・地域振興

(1) 生活再建工事

ハッ場ダム関連工事に伴う移転家屋数は全470戸（うち水没世帯340戸）、用地取得456haに及ぶ大規模なものであった。住み慣れた土地の近くへの移転を実現し、地域コミュニティを確保するために現地再建方式を採用し、各集落の山側を切り開き、湖面周囲の水没しないラインに移転するための代替地（平地）をつくり、集落が山側にずり上がる「ずり上がり方式」にて造成工事を行った。これと併せ、代替地盛土の耐震対策や、移転後の集落を保全するための砂防堰堤等の防災施設も整備し、既存集落の生活環境等に影響を与えないことを大前提とした施工計画の立案と、これを実現するための綿密な工程監理を実施した。

また、地域の生活、産業を支える国道・県道（22.8km）・JR吾妻線（10.4km）を付替えるとともに、ずり上がりに伴い孤立してしまう集落間を結ぶため、ハッ場大橋（群馬県施工）や不動大橋等を架け替え、付替国道は、地域高規格道路の一角を担うべく拡幅した。JR吾妻線については約8kmをトンネル化し、降雨・積雪に対する防災性を向上させ、曲線改良、踏切除去により安全・安定輸送を確保した。なお、鉄道工事の設計・施工については、JR東日本に委託して行われた。

ハッ場ダムの整備により、新たな湖面が出来ることによる貯水池保全のための地すべり対策について、押さえ盛土等の安全対策も実施し、安全を確保している。

(2) 地域振興

ハッ場ダムの工事現場は、日々変化するダム建設のあらゆる場面を観光資源と捉え、「やんぱツアーズ」など、多くの人々に水源地に来ていただく仕組みづくりを展開し、SNSやホームページ、Youtubeなどでファン層の裾野拡大、リピーターの確保に取り組むとともに、ダムマニアによる自主的な情報発信への仕掛けも行われた。ダム完成以降を見据え、官主導から地域主導への移行を念頭に、ダムを基軸とした観光地域づくり、地域が儲かる仕組みづくりに取り組み、地元を引き継いだ。



写真9 不動大橋（湖面2号橋）

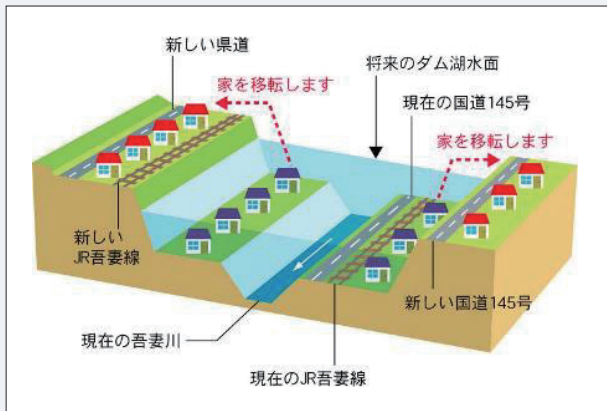


図4 現地再建方式イメージ図



写真10 やんぱツアーズ実施状況



図5 ダムカード提示で、地元店舗割引特典



写真11 ハッ場ダム（2021（令和3）年11月）

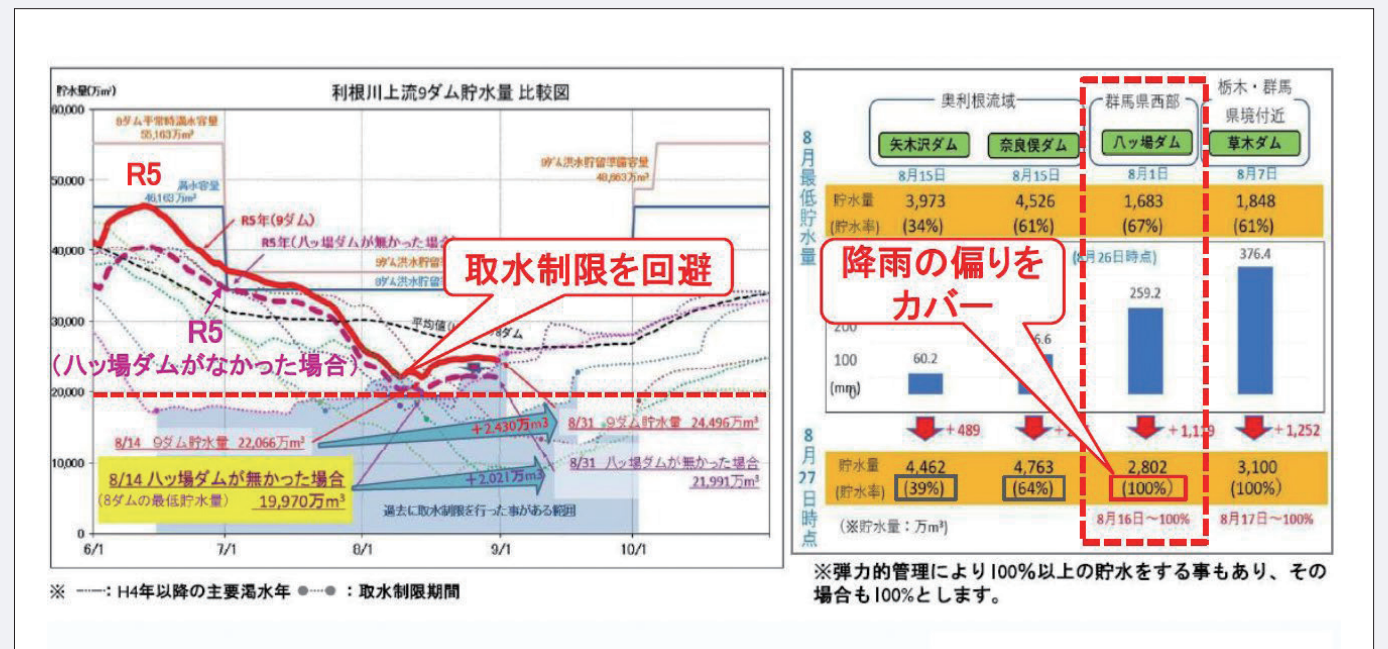


図6 ハッ場ダムの効果（利水面）

6. おわりに

令和元年東日本台風では、試験湛水中のハッ場ダムは大量の洪水を貯水池内に貯め込み、吾妻川、下流の利根川長区間にわたる水位低下に大きく寄与した。

また、記録的な少雨により、利根川上流ダム群の貯水量が急激に低下した2023（令和5）年の夏には、ハッ場ダムが吾妻川流域の降雨を貯留したことにより、取水制限の回避に貢献するなど、利水面でも大きな効果を発揮している。

首都圏をはじめとした多くの方々が、名勝・吾妻峡、

川原湯温泉を有するこの地を訪れ、ハッ場ダム建設の歴史や効果等について理解を深めるとともに、水源地域と首都圏の間の交流が益々進み、相互理解の下に水源地域の活性化が進むことが期待される。

< 図表・写真の提供 >

写真1	長野原町
図2、写真4	群馬県
図3、写真5	東京都
図1、4～5、 写真2～3、6～11 図6	国土交通省 国土交通省 HP 掲載資料追記編集